

## 1 研究主題

小学校総合的な学習の時間における人とかかわる力を育む教師の支援に関する研究

- 相互交流の場の充実に視点を当てて -

### (1) 研究主題設定の理由

1970 年前後以降、高度経済成長期の結果、核家族が進み、祖父母とのふれ合うことが少なくなっている。また、家族で一緒に行動したり、話をしたりする時間が減少している。さらに、地域連帯意識の希薄化によって、地域住民とのつながりが薄くなり、児童が異なる世代の人と交流することが難しくなっている。

このような社会的背景の中、対人関係が希薄になるとともに「人とかかわる力」が育ちにくい状況にある。このような現状を踏まえ、自分から積極的に話しかけたり、自分の気持ちを相手にきちんと伝えたり、相手の話をしっかりと聞いて自己の生き方を問い直したりすることができるような学習の場を学校教育の枠組みの中で意図的、計画的に設定する必要がある。そこで、本研究では、総合的な学習の時間に児童と異なる世代の人とかかわる場を設定し、かかわる過程に生起する課題に対して主体的に解決しようとする意欲やかかわる力を育てるための教師の支援の在り方を追究することとした。

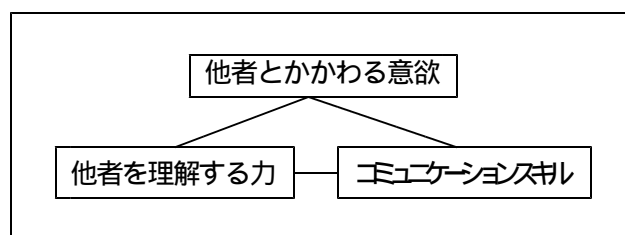
### (2) 研究主題に関する基礎的研究

#### ア 人とかかわる力について

教育課程審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」(平成 10 年 7 月 29 日)の中で、各学校に共通する課題の一つとして、家庭や地域社会の教育機能の低下が挙げられており、次のように記述されている。「今日、社会が豊かになり、また少子化が進む中で、これまで家庭や

地域社会が幼児児童生徒に果たしてきたしつけや倫理観、社会性の育成などの教育機能が低下してきている。」(抜粋)また、愛知淑徳大学の植村勝彦は、「写真投影法」を通して見た子どもたちの姿の中で、「確実に中学生の対人コミュニケーションは、とくに異世代とのコミュニケーション能力を含むさまざまなソーシャルスキルも低下していることは明らかであろう」と指摘している。

両者に共通することは、社会の規範意識やコミュニケーション能力など、いわゆる「人とかかわる力」であると考えられる。この「かかわる」ということについて、広辞苑では「関係する、かかわりあう、たずさわる」とある。本研究では、「人とかかわる力」の様相を次のように規定することとした。



各様相は相互に関連し、統一的に育成する必要があると考える。またこれらの様相は、体験を行うことによって、高まっていくと考える。

## 2 学習指導計画

本研究の目的を達成するために、授業実践を行うこととしているが、次の理由から、高齢者を児童がかかわる対象とした。

学区内に高齢者福祉施設があり、直接かかわることが必要に応じて何回もできる。

高齢者とのかかわりから、児童は生きるうえで必要なさまざまなこと(知識や知恵)について学ぶことができる。

表 1 は、学習指導計画である。

「ふれる」では、高齢者等についての関心を喚起

するために、疑似体験等の具体的な活動を取り入れることとした。加えて、高齢者福祉施設の職員から直接話を聞く機会を設けることとした。「つかむ」以降については、児童自ら課題を設定し高齢者福祉施設を訪問することを活動の中心とし、訪問時に生じた諸課題を解決する方策を検討し 方策を実践し 評価する・・・を繰り返し体験させ、その過程

において「人とかかわる力」を育てていきたいと考えた。

そのために、各活動の終了時には、活動に係る自己評価及び相互交流の場を設定することとした。なお、本研究では、この自己評価や交流活動を通して学習に広がりや深まりを生みだすことのできる教師の支援の在り方を追究することに視点をあてる。

表1 学習指導計画（全31時間）

1 単元名 地域の老人保健施設「 」と交流をしよう

2 単元のねらい

- (1) 高齢者疑似体験や老人保健施設「 」での高齢者との交流を通して、高齢者に対して自分なりの思いや考えをもつことができる。
- (2) 交流の経験を基に、かかわり方について学習課題をつくることができる。
- (3) 高齢者の立場に立ったかかわり方を追究し、高齢者との交流をより充実しようとする気持ちをもつことができる。
- (4) 高齢者に対して、自分たちにできることを考え、行動することができる。
- (5) 高齢者との交流で学んだことを、日々の生活における人とのかかわり方に生かすことができる。

3 指導計画（全31時間）

段階名	時間	活動内容	教師の支援
ふれる	第1時	60年後の自分の姿を想像する。	・自分の姿が想像しやすいように本やビデオを準備する。
	第2・3時	高齢化の現状を知る。	・年齢層の様子がわかるように人口分布の資料を提示する。
	第4・5時	・高齢者問題に関心をもつ。	・全員が疑似体験ができるようにする。
	第6時	高齢者の疑似体験をする。	・高齢者に関する情報や施設の情報を得るために、老人保健施設職員の方を招く。
	第7・8時 第9・10時	老人健康保健施設「 」の職員の方の話を聞く。 交流を高齢者の思いに触れるような交流を考える。 1回目の交流を行う。	・高齢者と十分ふれ合えるように、事前に発表方法、話しのかけ方などを考えておくように助言する。
つかむ	第11時	1回目の交流をもとに、自己課題を設定する。	・施設見学や交流会で感じたことや疑問に思ったことなどを振り返るための場の設定をする。
	第12時	・1回目の交流を振り返る。	・見通しをもって活動することができるようにワークシートを作成し活用させる。
	第13時 第14~16時	・高齢者の気持ちを考える。 ・発表した内容や意見をもとに課題を設定する。 課題を解決するための計画書を作成する。 ・見通しをもって計画書を作る。	・これまでの交流の様子がわかる資料を再度見直すよう助言する。 ・何をどのような方法で調べるのかを明確にするために個人との話し合いの場を設定する。
調べる	第17~20時	計画書をもとに、課題を追究する。 ・自分たちで考えた方法で追究する。	・高齢者や施設の方などと事前に打合せ等しておく。 ・自信をもって交流ができるように、実際に高齢者を介助している場などを提示する。
	第21~22時 第23時	発表会の計画をたてる。 発表会をする。	・自分たちの伝えたいことを理解してもらうために、内容を焦点化するように助言する。
	まとめ ・つなぐ	第24~28時 第2回目の交流の計画をたてる。 ・1回目の交流を参考にする。 ・具体的なかかわり方について模擬実習をする。	・1回目の交流と比較してどこを工夫したかわかるように助言する。 ・高齢者に自分たちの思いを伝えるにはどんな方

	第 29~30 時 第 31 時	第 2 回目の交流を行う。 これからの高齢者とのかかわり方について自分たちにできることは何かを考えさせ、次へとつなぐ。	法が効果的であるかをこれまでの学習を振り返って検討するように助言する。 ・高齢者の気持ちを考えた交流になっているか実際にシミュレーションをして検討するように助言する。 ・挨拶をしたり、学校の様子を伝えたり、自主的に施設を訪問したりするなど自分が取り組むことが可能になるような場の設定をする。
--	---------------------	--	---

表 2 第 12 時の学習指導案

本時の目標

1 回目の交流で体験したことを基にして、高齢者の気持ちを考えることができる。

児童の活動・内容	教師の支援・留意点	学習過程における評価の観点
<p>1 今日の授業のねらいを確認する。</p> <p>前回の交流で困ったこと、できたことを出し合い、高齢者の気持ちを考えよう。</p> <p>2 できたこと・困ったことについて話し合う。</p> <p>・話し合いの内容</p> <p>1 どんなことができたか。</p> <p>2 どんなことに困ったか。</p> <p>交流してできたことを発表する。</p> <p>発表内容例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんのお年寄りと話ができた。</li> <li>・孫、ひ孫の話ができた。</li> <li>・いろんなことを話すことができた。</li> <li>・子どものころの話がいっぱいできた。</li> </ul> <p>困った場面を焦点化し、その理由やその解決策について話し合う。</p> <p>話し合う場面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・折紙の時、しない人がいたから「やらないんですか」と言っても返事をしてくれませんでした。</li> <li>・折紙のとき、おじいちゃん、おばあちゃんが説明を聞いてくれなかった。</li> </ul> <p>話し合ったことを発表する。</p> <p>3 高齢者の体のことについて話し合う。</p> <p>高齢者疑似体験を思い出して発表する。</p> <p>発表内容例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お手玉のとき、手が動きにくかった。</li> <li>・折紙で指の不自由な人がいた。</li> <li>・耳が不自由で話を通じなかった。</li> <li>・話が聞き取りにくかった。</li> <li>・絵や字が見えないと言われた。</li> </ul> <p>4 「おじいちゃん、おばあちゃん、楽しかったかな」について話し合う。</p> <p>グループで意見をまとめて発表する。</p> <p>まとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板に前時の資料を提示する。</li> <li>・各グループの資料を印刷して配布する。</li> <li>・1と2は教師が整理して子どもたちに提示する。</li> <li>・どのような場面で交流できたか具体的に説明するように助言する。</li> <li>・自分たちであればどうするか具体的な場面がイメージできるように交流のときの様子を思い出しながら発表するように助言する。</li> <li>・高齢者の体の様子について気づくことができるようにする。</li> <li>・高齢者体験セットをつけた経験を思い出して意見を出すように助言する。</li> <li>・具体的な場面でとらえるように指示する。</li> <li>・これまでの学習を振り返って、高齢者の立場で考えるように助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の交流を振り返りながら話し合いに参加している。</li> <li>・観点ごとにそれぞれの状況をつかむことができる。</li> <li>・自分の体験を友だちに分かりやすく伝えることができる。</li> <li>・友だちの意見を自分の考えと比べながら聞くことができる。</li> <li>・自分の体験を友だちに分かりやすく伝えることができる。</li> <li>・具体的な方法を考えることができる。</li> <li>・高齢者疑似体験等を想起しながら高齢者の体のことについて理解することができる。</li> <li>・具体的な内容を考えてまとめることができる。</li> <li>・高齢者の立場に立って物事を考えようとするすることができる。</li> </ul>

図 1 は、第 12 時（話し合いの場）の学習指導の展開を図化したものである。

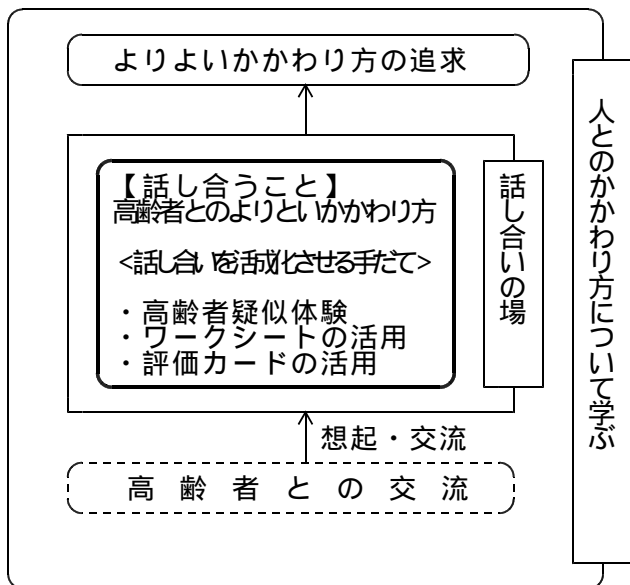


図1 指導展開(第12時)

### 3 授業実践の分析と考察

授業実践の分析に当たっては、上記の手だてが、高齢者についての理解や他者とのかかわり方にどのような影響を及ぼしたかを観点とすることとした。

#### (ア) 高齢者疑似体験とのかかわり

高齢者とのふれ合いの経験がほとんどない児童にとって、高齢者が日々どのような思いで生活し、どのようなことに不自由さを感じているのか想像できにくい。そこで、高齢者疑似体験をすることにより少しでも高齢者の体のこと、高齢者の思いや願いなどに目をむけることができるようになるのではと考え、高齢者との交流の前に、高齢者疑似体験の場を設定することとした。

しかし、1回目の交流では、相手の気持ちや思いを考えて行動している児童は少なかった。そこで、高齢者との交流の様子を想起させ、1回目の交流の問題点等について話し合わせた。話し合いでは、高齢者体験を児童が行ったときの写真と、第1回の交流の場面の写真を掲示した。写真を見せることによってその時の様子が具体的になり、話し合いが活性化した。

図2は、その時の様子の一部をまとめたものである。

T:教師 C:子ども

C171	めがねをかけたけどすごく見えなかった。
C172	ぼやけて見えにくかった。
T173	ほかはどうでしたか。歩く時どうでしたか。色は。
C174	色が白かった。
C175	色が分かりにくかった。
T176	では色鉛筆で塗る時。
C177	何色が分かりにくかった。
T178	みんないろいろと言ってくれたけど、ここと関係があるのではないかな。おじいちゃん、おばあちゃんの体と。みんなはどうですか。
C179	違った。反対。
T180	どのように反対。
C181	<u>僕たちの手は動かしやすいが、手が動かしにくくて、僕たちの足は動かしやすいが足が動かしにくいと思う。</u>

図2 高齢者体験を思い出す場面

児童が高齢者疑似体験の時のことを思い出しながら自分たちの体とは違うことに気付いていく場面であるが、高齢者疑似体験は、あくまでも間接的な体験であるので、それをしたからすぐに高齢者の体の様子が理解できるものではない。高齢者疑似体験での気づきを想起させ発言させることにより(C172・174・175・177)、自分の体の動きと比べて高齢者の体の特徴について気づきができるなど(C181)、高齢者について理解を深める様子がうかがえた。

#### (イ) ワークシートとのかかわり

高齢者とのかかわり方についての追求を深めるために、話し合いの前に、交流を通して自己の中に残った意識、「できたこと」や「困ったこと」、「気づきや感想」などを整理させておく必要がある。そこで、それらの整理ができるワークシートを作成した。そして、記述したそのワークシートを話し合いの資料として情報の交流を行った。事前の準備によって活発な情報交流ができた。図3は、ワークシートの記述をまとめたものである。

気付いたこと	人数	できたこと	人数	困ったこと	人数
トイレの工夫	18	発表ができた	10	一緒にしてくれない	11
昔の話が多い	6	話gできた	9	話が通りにくい	10
手が動かない	3	折り紙を教える	3	聞こえにくい	4
部屋の工夫	3	おはじき	1	手や指が不自由	3
耳が聞こえにくい	2	カルタ	1	絵や文字が見えない	2
車椅子で動きにくそう	2	お手玉	1	質問ができなかった	1
目があまり見えにくそう	1	鍵盤ハーモニカ	1	ゲームができない	1
孫を大切にしている	1	その他	3	その他	4
その他	9				

図3 1回目の交流での子どもの感想

第1回交流後の「気付いたこと」には、「トイレの工夫」や「部屋の工夫」(記述数 21) など高齢者福祉施設のハード面に係わる記述が多かった。反面、高齢者の体の様子や気持ちを考えたものは少なかった(記述数 9)。また、「できたこと」には、「発表ができた」や「話gできた」(記述数 19) などコミュニケーションの有無に係る記述が多かった。なお、その半数が双方向のコミュニケーションが図られた様子のがえる「話gできた」であった。そして、「困ったこと」には、「一緒にしてくれない」や「話g通じない」(記述数 21) など他者とのかかわりに係る課題が上位に挙gった。

話し合ふ際には、この集計結果を児童に提示した。それは、多くの児童の思いや考えなどを共有化させたい思いがあったからである。その結果、交流時における児童の様子は自分の思いや考えと比較しながら他者の発表を熱心に聞く様子が数多くみられた。同時に、児童に提示したことは、クラス全体で交流時の驚きや疑問、成果をきちんと振り返ることができた点においても有効であった。

また、この集計表をもとに「手が動かなかつたり、耳が聞こえにくかつたり、体が思うように動かないのに無理して一緒にしたお年よりもいたよ」とか、「困ったことで、一緒にしてくれないと書いた人が多かったけれど、その理由は、子どもが嫌いであつたり、おはじきの嫌いな人もいるんじゃないかな」など、表面的なとらえ方ではなく、高齢者の思いや考えを推察した発言もあり、児童が高齢者へ心理的に近づいている様子gうかがえた。

このように、高齢者の気持ちや体のことを考えるきっかけづくりという点で有効であったが、お互いの思いや考えを共有するための場の設定が必要である。

また、ワークシートに書いている児童の感想の多くは、「高齢者と話gできた」ということであつた。そこで、話し合ひのきっかけとして、児童のワークシートの記述内容を黒板に提示した。

提示後、どのような話を高齢者としたか児童に問いかけると、「孫やひ孫の話gできた」「戦争について話をした」「おはじきについて話をした」「ス

ポーツについて話をした」「小学校のクラブについて話をした」などがでてきた。このことを契機に、児童は「自分から話しかけた」「いろいろなことを話しかけて、それで友達になろうと云って友達になった」など、高齢者とコミュニケーションする際の方法や留意事項について発言する児童gでてきた。

児童の感想の中から共通の内容を取り出し、掲示することは、児童の気持ちを集中させるとともに、友達の発表を聞きながら自分の交流の様子と比較して振り返ることを可能にする点で効果的であつた。

授業ではその後、児童が経験した中から問題場面を設定し、その原因や対応策について話し合う場面へとなるが、その話し合ひを児童にとって有意義なものにするためにワークシートを活用することとした。図4は、そのワークシートである。

	折り紙の折り方の説明をした時、「わからないことはありませんか」と聞いても返事をしてくれませんでした。
なぜ返事をしてくれなかったと思いますか。	
そんな時、どのようにしたらいいと思いますか。	
	折り紙を実際に折りはじめても、おじいちゃん、おばちゃんが折ってくれなかった。
なぜ折ってくれなかったと思いますか。	
そんな時、どのようにしたらいいと思いますか。	

図4 ワークシート

第1回交流時のことについてワークシートに、「一緒に活動してくれない」「話g通じにくい」と記述した児童が多かつたので、この2点について話し合わせれば、高齢者の体の状況について考え直したり、かかわり方について具体的な方法を考えたりするようになるのではないかと考えた。

図5は、そのワークシートの集計結果である。

耳が遠いので聞こえない。	23	大きな声で言う。	23	体が不自由だから。	23	手伝ってあげる。	34
やりたくなかった。	5	もう1回声をかける。	5	折り方が分らなかった。	5		
「やらない」と言い辛かった。	2	「一緒にやろう」と言う。	2	折るのが難しかった。	2		
その他	4	肩をたたく。	4	その他	4		

図5 子どもの考え

・ の質問については、ほとんどの児童が「耳が遠くて聞こえない」「体が不自由だから」と高齢者の体の状況を考えて記述していた。また ・ の質問については、高齢者の体のことを意識して、「大きな声で言う」「もう1回声をかける」など相手に応じたコミュニケーション技法に係る記述が多くみられた。

授業では、この集計結果を児童に提示した。そのことが契機になり、「大きな声で言う」については、「耳元で聞こえるように話す」「ゆっくりと話す」「はっきりとわかるように話す」など、交流時の体験を関連づけて、より具体的な方法が児童の中からでてきた。

図6は、その時の様子を一部抜粋したものである。

T:教師 C:子ども

C104	耳がおかかったら近くまで行ってあげたらいいと思います。(同じです)
C105	大きな声で話せたらいいと思う。(同じです)
C106	耳がおくて聞こえなかったら、もう一回やらないのですかと言ってあげたらいい。
C107	大きい声で言う。最後に聞こえますかと聞いたらいい。
C108	肩をたたく。
T109	もう少し付け加えてくれる。
C110	えー。
C111	肩をたたいてなんか声をかける。
T112	肩をたたくというのはどういう意味かな。
C113	じゃけーこうやってやること。(隣の子とやってみる)
C114	もう一度折り方を教えてあげればいい。
C115	みんなで声をかけていったらよい。

図6 いろいろなかかわり方を発表する場面

児童は、1回目の交流で困ったことを頭に描きながら発言することができた。

交流という共通体験をしているので、友だちの思いや考えを自分の体験と重ね合わせて考えて発言しようとする輪が広がっている。また、C108の「肩をたたく」の発言に対しては、発言者が実際に隣の子の肩をやさしくたたいてみせた。たたき方の実演

をしたことによって、友だちの方法を参考にして次の交流に生かそうとしたり、前回のかかわり方に不足していた方法に気付いたりすることができた。

このように、ワークシートの中からロールプレイできる場面を抽出し、授業で活用すれば、より良いかかわり方ができるのではないかと考えた。

(ウ) 自己評価・相互評価とのかかわり

高齢者との交流を2回行ったが、交流に関する自己評価をすることは、交流の場や話し合いの場などにおける自分の思いや考えをきちんと振り返ることができるとともに、課題が明確になり好ましいかかわり方について考えることができると考え、自己評価カードを活用した(図7)。

また、2回の自己評価カードを比較することによって、自分の工夫や努力、成長などを発見・実感できると考えた。

自己紹介は、相手に分かるように言えましたか				
1	2	3	4	5
出し物や一緒にしたことは、楽しかったですか				
1	2	3	4	5
お話しすることができましたか。				
1	2	3	4	5
また行きたいですか。				
1	2	3	4	5

図7 自己評価カード

2回の自己評価カードをクラス全体で集計し、比較すると、2回目の交流後の自己評価は1回目と比べ、どの項目とも肯定的な評価へと伸びがみられた(図8)。

項目								
評価	1回	2回	1回	2回	1回	2回	1回	2回
1	0	0	0	0	2	2	0	0
2	0	0	2	1	2	1	0	0
3	10	1	1	0	6	2	1	1
4	12	3	4	6	8	4	3	2
5	12	29	27	26	16	24	30	31

図8 自己評価の結果

1回目と2回目を比較すると、設問 については特に肯定的な評価への伸びが大きく、2回目の交流で課題意識をもって臨み、満足のいく交流を行えたことがうかがえる。設問 については、31名の児童が「楽しかった」と回答している。その中には1回目で「2」をつけた児童Aがいた。1回目の交流の時に自分の説明が高齢者にうまく伝えられなくて涙を流す場面があったが、2回目の自己評価カードでは、評価を「5」としていた。自分たちの考えたかかわり方で交流することができたために達成感を味わい、その喜び等から「5」と評価したと考えられる。

また、設問 については、1回目は評価にばらつきがあった。しかし、高齢者と話すための具体的な方法を話し合いの場で考えて2回目の交流に臨んだことから良い評価をつけている。2回目においても評価の低い児童は、聞き取り調査を行った結果、高齢者と話せる場が少なかったためである。すべての児童が高齢者と話せる場を確保することは、今後の課題である。設問 については、「5」と1名増加している。

相互評価カードについては、交流が自己満足に終わらないように、また次への意識づけになると考えて、第1回の交流後に高齢者や施設の方に評価をお願いした。指摘事項としては、話し方や声の大きさなどであった。児童は指摘事項については、意識して交流に臨んでいたことであったが、不十分であることがわかった。指摘事項については、児童にとって次の交流へ向けての大きな課題となった。また、自己評価と相互評価のずれは、自己評価を客観的にみる際に参考となった。



高齢者との交流の様子

#### 4 子どもの「学び」を育む授業づくりの改善の視点

高齢者とのかかわり方を考えるための支援の在り方を探るために指導計画を立案し、実証授業を行ったが、次の2点について再考する必要がある。

- 1 交流を通しての課題の意識化
- 2 高齢者とのかかわり方についてのロールプレイ

##### 交流を通しての課題の意識化

児童は、高齢者との交流で、思ったり考えたりしたことをワークシートや感想文で書くことができたが、自分の意見を出し合い、話し合うことで、お互いの考えを共有し、課題を意識化するまでには至らなかった。その時の様子や思いや考えなどについての発言を促すことにより、高齢者とのかかわり方についてもっと深めることができ、次への課題が明確になったと考える。

##### 高齢者とのかかわり方についてのロールプレイ

交流時に、自分から話しかけたり、一緒に行動したりした児童は、「耳が遠かったら近くまで行ってあげたらいい」「大きな声で話したらいい」など、具体的な例を挙げて意見を出すなど、子どもたちは一生懸命に自分なりのかかわり方について考えて発表したがなかなか深まらなかった。しかし、一人の児童が「肩をたたく」と発表した時に隣の子の肩を実際にたたいてみせた。その動作に他の子は集中し、さらに他の6人がその動作をしたためにみんなの意識が高まった。このことから、ロールプレイできる場を工夫すれば、さらに高齢者とのかかわり方を深める事ができたと考える。

#### 5 学習指導計画の再構成

今回の授業実践の分析を通して、指導案を表3のように再構成した。

表3 再構成した学習指導案

過程	学 習 活 動・内 容	教師の支援・留意点	学習活動における評価の観点
導入 10分	1 今日の授業のねらいを確認する。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     前回の交流で困ったこと、できたことを生かして、高齢者の気持ちを考えよう。                 </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板に前時の資料をグループごとに掲示しておく。</li> <li>・高齢者体験を思い出すように提示する。</li> <li>・高齢者体験の場面を交流と関係付けて考えるように助言する。</li> <li>・高齢者の体の様子について助言する。</li> <li>・話し合いの観点を明示する。</li> <li>・具体的な場面で発表するように助言する。</li> <li>・個人のとらえ方だけでなく周りの子の意見も総合して考えるように指示する。</li> <li>・具体的な場面でお年よりの反応も付け加えて発表するように助言する。</li> <li>・高齢者体験と関係付けて考えるように助言する。</li> <li>・解決の方法を実際にやってみるように助言する。</li> <li>・今日の学習を振り返り、解決できることとできないことに分けて考えるように指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観点別に自分達の交流の状況をつかむことができる。</li> <li>・高齢体験を思い出す事ができる。</li> <li>・高齢者体験の内容が高齢者の毎日の生活と関係していることに気付く。</li> <li>・高齢者の体の状況について考えることができる。</li> <li>・観点ごとに話し合いができる。</li> <li>・前回の交流を振り返りながら話し合いに参加している。</li> <li>・具体的な場面で発表することができる。</li> <li>・自分の体験を友だちに分かりやすく伝えることができる。</li> <li>・友だちの意見をしっかりと聞くことができる。</li> <li>・相手の立場にたって物事を考えようとする事ができる。</li> <li>・すぐに解決できることとすぐに解決できないことに分けて考えることができる。</li> </ul>
展開 25分	2 高齢者疑似体験を思い出して発表する。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     予想される子どもの発表内容                      ・体が動きにくかった。                      ・色がわかりにくかった。                      ・ぼやけて見えにくかった。など                 </div>		
	3 できたこと・困ったことについてグループごとに交流の様子について話し合う。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     1 どのようにできたか。(工夫したか)                      2 どんなことに困ったか。                 </div> <p>交流でできた様子について発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     予想される子どもの発表内容                      ・自分から話しかけた。                      ・話す内容を前もって考えておいた。                      ・話しかけてもらった。など                 </div> <p>交流で困ったことについて発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">                     予想される子どもの発表内容                      ・返事をしてもらえなかった。                      ・話が通じなかった。                      ・自分達と同じようにできなかった。など                 </div>		
	4 困った原因と解決の方法を話し合う。グループの意見をワークシートに書く。発表する。		
まとめ 10分	5 すぐに解決できることとそうでないことに分けて考える。		
	6 次回の学習内容を伝える。		

授業の展開時には、教師は児童の発言の意味していることのその背景を体全体で読みとり、必要に応じて学級全体で共有化していくことが重要である。また、児童の発言を対比したり結びつけたりして、発言の価値付けを行うとともに、発言したことの喜びを実感させる必要があると、本授業実践で再認識しただけに、研究のまとめに当たって記述しておくこととした。

## 6 研究のまとめ

高齢者福祉施設「 」との交流を振り返り、高齢者とのかかわり方について考える場の工夫をすることによって、自分たちの考えを生かし、高齢者の体や気持ちを考えてかかわろうとする姿が見受けられた。

このことは、交流する前に高齢者の体や気持ちを

少しでも理解させるために疑似体験を行ったことが、予想と現実のギャップを肌で感じることになり、話し合いの場面において活性化につながり、思ったり考えたりしたことをお互いが認め合ったり、改善策を考えたりするなど共通の目的意識をもつことができた。

また、話し合いの場を工夫することで、「自分だったら」と相手の気持ちを推し量り、自分におきかえて考えたり、「こまったこと」を共通の課題として話し合ったりするなど、自分たちの行っている学びの価値感や意義を見い出し、高齢者一人一人の思いや考えや願いなどの違いに目を向け、相手の立場を意識して行動することができた。

今後は、お互いの気持ちを理解し合い、学習の広がりや深まりが実感できるような課題を設定し、追究活動を行うための支援について探っていきたい。